

長谷川 秀一

建築設計製図Ⅲ

第1課題
ライブラリー

3年1組

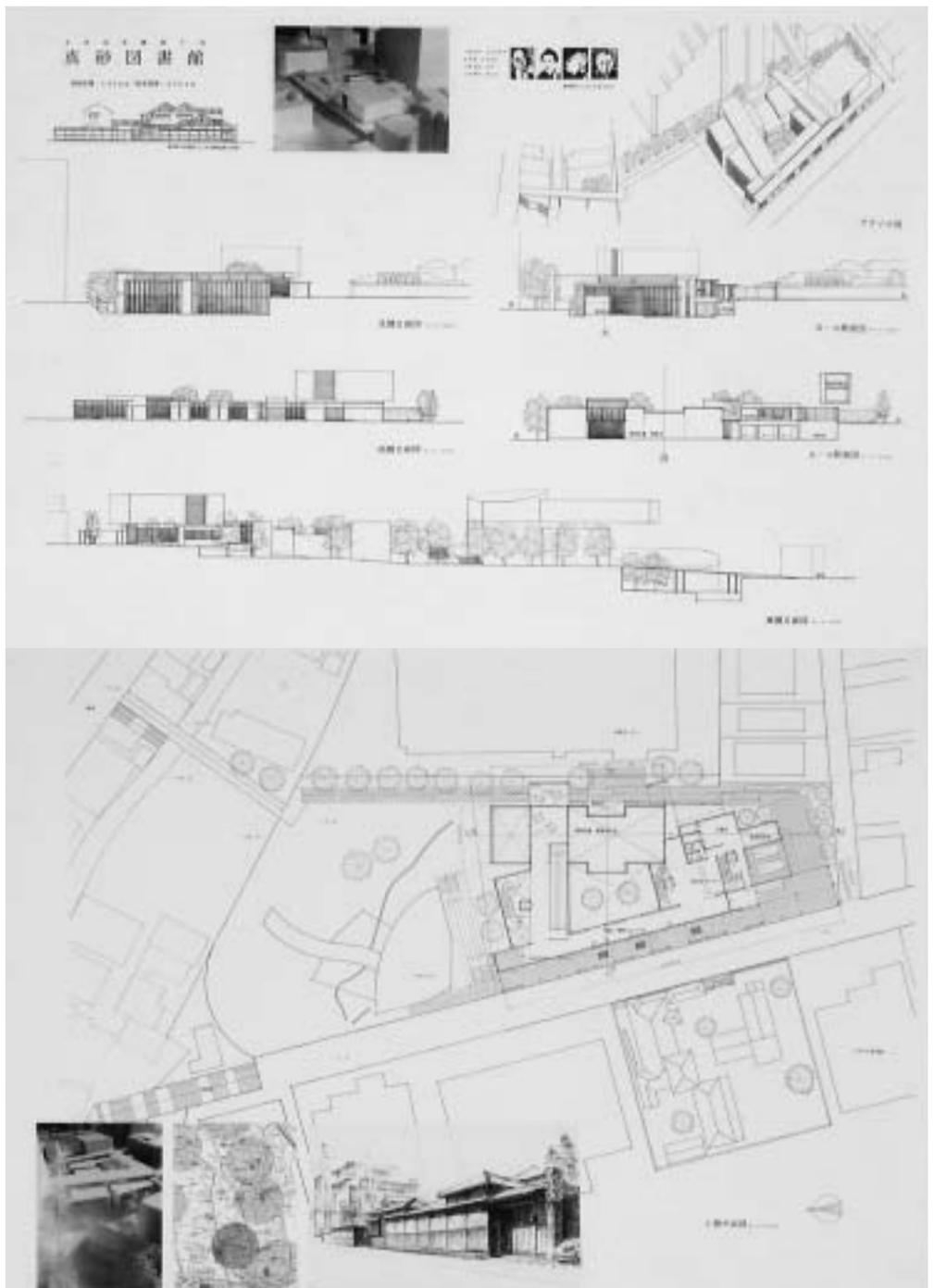
担当= 若色 峰郎
関澤 勝一
飯田 善彦
今村 雅樹
野沢 正光
橋本 功
坂 茂
吉田 博

いけない。平等に与えられた勉強の場なのだから。機能的にみても対等な関係であることが望まれる。同じ意図でつくられたと思われるルイス・カーンの『エクセター図書館』は、5つの要素（書庫・閲覧室・通路・VOID・CORE）を1単位とし、増殖させていくという手法を用いていることを発見した。これを使えば、図書館にとって肝要である“均質空間”を実現できるのではないだろうか。

指導=坂 茂

我々のグループは、まず近代の図書館建築として傑作とされている、ルイス・カーンのエクセター、アルヴァ・アアルトのヴ

長谷川 秀一
図書館は、威厳を持っては



矢原 奈欧

イープリ、ハンス・シャロウンのベルリン、そしてグンナー・アスブルンドのストックホルムの図書館を、各自がひとつ選び分析することから始めた。分析により、図書館・建築計画上の理解と、それぞれの巨匠の独自のプログラムや幾何学的ルールやシステムの構築プロセスが見えてきた。そして各自自分の分析した要素を自分なりに展開し、与えられた敷地のコンテキストに適合させていく設計プロセスを取った。この長谷川君の作品は、ルイス・カーンのエクセター図書館で使われている黄金比を使い、平面・断面とも完璧な共通ルールを見い出すことから始まっ

た。しかし彼は、その幾何学的ルールではなく、カーン特有の機能別ダイアグラムが平面上、上下左右完全に反復されている点に注目し、その全ての機能が配された1/4の単位を抜き取り、それを与えられた細長い敷地に合うよう配列し直すという設計手法を作り出した。それら一連の分析から、コンテキストに合った独自の設計手法を作り出した流れは見事であった。ただ、機能の再配列のし方と連結のし方は、まだ最善な形にいたっていないように思うが、設計期間の半分を分析に当てたこのグループとしては、少ない時間のなかよくまとまったプロジェクトといえるであろう。

矢原 奈欧

本郷真砂町界限にはかつて、一葉など明治期の文学界を代表する人たちが多く住んでいた。そして今もその頃の面影を留める家などが残っており、敷地の西側にも木造の大きな古い屋敷が残っている。図書館をそうした町の文脈に合わせ、また北側からのアプローチを改善したり、雑誌コーナーが町の情報コーナーになるなど多様な使い方ができるようにし、町がより豊かになることを目指して設計した。

指導=野沢 正光

建築を考えることは、多様な道筋がある。そしてそれは社会時代の要請によっても当然乍ら変化する。周辺の環境、(それが自然のものであれ人工のものであれ)や周辺の歴史を尊重することを建築を考える道筋の主要なひとつとすることは今までも重要なことであつたしこれからますます大切なこととなる。気候条件を建築に厳密に反映する試みなど、それらを科学的合理的におこなう手だては、やっと今日、われわれが手にしつつあるものである。矢原君のプロジェクトは建築の内外をそうした根拠あるものによって構想することを意図し試みられたものであつた。この町の歴史の重さへ

の言及とその建築計画へ反映、北側の町に敷地から新たに架けられた橋、それがぬける事により新たな意味を持つ事になった東側の巨大な建物との関係、西側木造住宅のスケールへの着目、とそれに依る計画建物の平屋化、建物内と建物外、それをつなぐ半屋外空間の作る多様な気候と情景それらと諸室の条件との整合など彼の関心は、ここに現れるすがたに誠実な根拠を付与する事にありここで計画された建築はそうした試みの誠実な結果であつたとして特に高い評価をした。設計図書に付けられた隣接木造民家の綿密なスケッチはそうした姿勢のあきらかな証拠であつた。